熊本大学教育学部紀要
第64号, 77－84, 2015

“*May* the Force Be with You!” ―英語の may 祈願文について―*

松　瀬　憲　司

“*May* the Force Be with You!”: On the Optative Sentence with *may* in English

Kenji Matsuse

（Received October 1, 2015）

The optative sentence with *may* in English, a substitution by the modal auxiliary *may* for the older present subjunctive, is peculiar in that it takes the word order “*May* + Nominative NP + Verb,” although it is not an interrogative sentence, which is, for example, used to get permission from someone: “*May* I ...?” Here we find that their syntactic structures are superficially the same, but their functions are totally different. Should this construction of the *may*-optative be taken as an ordinary subject-verb inversion? I do not think it should. Instead, as Quirk et al. (1985) say, I am in favor of regarding the sentence-head *may* as a “pragmatic particle” introducing a wish like the principal clause which has the same function: *I wish/hope*, because it is fully conceivable that its historical development could have been influenced by the *let*-hortative/imperative and the *mote*-optative, both of which have the same construction as the *may*-optative.

Key words : modal auxiliary, subjunctive, optative, pragmatic particle, hortative, imperative

1　はじめに

英語における祈願／願望文［optative sentence］について，大塚・中島（1982, s.v. *optative sentence*）では，以下のように述べられているが，

（1）　現在から未来にかけての事柄に関して，「そのようになることを望む」または，「そうであることを祈る」という意味を表すとき [1)]

a. 仮定法現在：Long *live* the Queen!

b. MAY: **May** you *succeed*!［**May** は「直説法現在」］

（2）　現在または過去のことに関して，（もはや）実現不可能なことを願望するとき

a. 仮定法過去・過去完了の倒置：*Had* you only *been* here!

b. If (only) ＋仮定法過去・過去完了：**If only** the weather *were* fine!

c. (I) wish (that)/ That/ O(h), that ＋仮定法過去・過去完了：

I wish it *was* tomorrow!, **Wish** you *were* here!, **Oh, that** I *had* but *known*!

ここからいくつかのことが分かる．まず，そこに現れる定形動詞 [2)] の法については，2 つの形式がある．すなわち,「仮定法（接続法）」と迂言的な「直説法定形法助動詞 may ＋原形不定詞」である．次に,（1）は通常，独立した「主節」と捉えられるが，（2）は基本的に「従属節」（を伴う）と思われる点である．（2a）は一見主語と定形動詞が倒置を起こしている主節のように見えるが，（2b）のように if を使って **If** you *had* only *been* here! とも言えることから，if の不使用に誘発された主語・定形動詞倒置形とも捉えられるので，従属節とも考えられる．さらに，（2c）より，‘（I）wish’ のような，従属節を導入する独特な主節の形式や補文標識が使用される場合があることも挙げられる．

そこで本稿では，上記 3 点を特に議論の背景に置きながら，英語における，法助動詞 may と共起する「may 祈願文」の発達を通時的に検討していく．本稿の構成は次の通りである．次節で，現代英語［P(resent-)D(ay) E(nglish)］に見られる祈願文の特徴を概観し，そこから may 祈願文についてより踏み込んだ議論のポイント

を探る．3 節では，今度は，時間を遡って，古英語［O(ld)E(nglish)］・中英語［M(iddle)E(nglish)］・初期近代英語［E(arly)Mod(ern)E(nglish)］における may 祈願文の使用状況を確認し，その通時的生成過程を把握する．そして最後の 4 節で may 祈願文の発達の流れをまとめることにする．

2 現代英語（PDE）における祈願文

まずその概略を Quirk et al.（1985），Declerck（1991），Biber et al.（1999），Huddleston & Pullum（2002）そして安藤（2005）により，以下の（3）～（7）にそれぞれ示す．

（3） Optative subjunctives are:

a. Used to express a wish.

b. In a few expressions of a fairly fixed type.

c. Often combined with subject-verb inversion: e.g. So *be* it.

d. Or MAY + subject + predication: e.g. **May** you always *be* happy!

e. Or *would* (*to God*) + *that*-clause with past forms of verbs: [3)]

e.g. **Would** (**to God**) **that** I'*d* never *heard* of him! —Quirk et al. (1985: 839)

なお，'optative subjunctive' という呼称は Curme（1977［1931］）の用語である．

（4） a. In a main clause, a wish (malediction or benediction) is introduced by *may*.

b. This use of *may* is very formal and rarely found in modern English, except in standing expressions.

c. *May* always expresses a present wish with future actualisation.

d. *Might* cannot be used in a similar way. —Declerck (1991: 416)

（4d）にあるように Declerck（1991）は過去形である might についても言及している．[4)]

（5） a. The combination of the inflectionless subjunctive and inversion gives the highlighted expressions below [in (5b) and (5c)] an archaic and solemn ring:

b. *Be it proclaimed* in all the schools Plato was right! (FICT[ION])

c. *Suffice it to say* that the DTI was the supervising authority for such fringe banks. (NEWS)

d. The auxiliary *may* is used in a similar manner to express a strong wish. This represents a more productive pattern:

e. **May** God *forgive* you your blasphemy, Pilot. Yes. **May** he *forgive* you and open your eyes. (FICT)

f. Long **May** She *Reign*! (NEWS)

g. [(5a) and (5d) above] are remnants of earlier uses and carry archaic literary overtone.

—Biber et al. (1999: 918)

ここで, Biber et al.（1999）が（5a）で 'inflectionless subjunctive' と呼んでいるものに該当するのは,（5b）では，Be であり，（5c）では，Suffice である．このように彼らは be でさえも，非定形動詞である（原形）不定詞ではなく，定形動詞の（無変化）接続法形と捉えているところが非常に興味深い．[5)]

（6） Optatives are:

a. Subjunctives: e.g. Long *live* the emperor.

b. Constructions which have *may* in pre-subject position, meaning approximately "I hope/pray":

e.g. Long **may** she *reign* over us!

c. Constructions which consist of *would* as predicator with a finite clause complement (and optionally the PP *to God* as another complement), but where the understood subject (*I*) is not expressed: e.g. **Would** (**to God**) **that** he *were* still alive! —Huddleston & Pullum (2002: 944)

（6b）で彼らは，may 祈願文は大凡 I hope/pray 構文を意味するとしているところに注目したい（下例（7c）も参照）．また，（6c）の would that 構文については，（3c）で Quirk et al.（1985）も言及している．

（7） a. 法助動詞のうち，may と shall には，古い叙想法現在［subjunctive present］の代用形としての用法がある．Coates（1983）はこの用法を "疑似叙想法"（quasi-subjunctive）と呼んでいる．

b. 独立節中で：きわめて＜格式的＞なスタイルでは，願望を表す叙想法現在の代用形として，独立節中で may が用いられる．「may ＋主語＋本動詞」の語順で, 話し手の願望（*ie* 祝福･呪いなど）

を表す．［例）］Much good **may** it *do* them!

c. 従属節中で：wish, hope, pray など＜願望＞を表す動詞に続く名詞節において，古い叙想法現在の代用形として may が用いられる．［例）］I **wish** my Brother *make* good time with him; I **hope/pray** he **may** (= will) succeed.

d. ＜目的＞＜譲歩＞を表す副詞節で用いられる may も，叙想法現在の代用形である．前者は「特別な種類の祈願文」（Sweet 1891: 106）であり，[6] ...［例）］And Busy caterpillars hasten/ **That** no time *be* lost; He flatters **that** he **may** *win*.[7] —安藤（2005: 286）

安藤（2005）では言及されていないが，（7d）で指摘されている譲歩節の典型例としては，Come what **may**（= What(ever) **may** come 'no matter what **might** happen'）が挙げられるだろう．[8]

以上から，特に，PDE における may 祈願文に注目してまとめてみると，

（8） a. 数的に多いとは言えない「正式な・擬古的な・格式的な・文学的な」願望表現の中で，同種の接続法現在定形動詞構文よりも「生産的」である（従って「代用形」となっている）．

b. 通常「may ＋主語＋本動詞」という主語・定形動詞の倒置語順を持つ主節として現れる．

c. I hope/pray/wish ＋従属節構文とほぼ同じ意味機能を持つ．（堀田（2014）も参照）

d. may の過去形である might は使用されない．

となり，（8a）接続法現在定形動詞構文との競合，（8b）いわゆる倒置語順を持つ主節という形式，そして（8c）I hope/pray/wish ＋従属節構文との競合の各論点を見ることができる．

さてここで，特に（8a, b）に関連して，安藤（2005: 882）の次の指摘に注目したい．

（9） "let による命令文"：非常に重要なことであるが，［A］［(2 人称に対する命令：e.g. **Let** him come in!)］の諸例は，真正の命令文であるが，［B］［(行為者が 1 人称複数の場合：e.g. **Let's** go)］，［C］［(行為者が 3 人称の場合：e.g. **Let** the wind blow!)］の諸例は，実は命令文ではない．・・・［B］，［C］において命令法の動詞が使用されたためしは英語史上にないのである．[9] 1，3 人称への＜勧告・命令＞は，OE においても叙想法が用いられたのであり，問題の 'let NP' 構文は，13 世紀初めから叙想法代用として徐々に台頭し，14 世紀中に確立したものである．

この「叙想法［＝接続法］代用として」の let NP 構文は ME 期の 13 ～ 14 世紀に確立したとあるが，*MED*（s.v. *leten*, 10. a）で let の用法を確認すると，確かに "In hortative and optative expressions" と言及されており，以下のような表現形式の初出例が挙げられている．

（10）a. **Let** him vs alle *kniȝte*. = **May** he *knight* us all. (*King Horn* 515 [c1300 (?c1225)])

b. Ah **late**［c1300: **lete**］we hine *welden* his folc on his willen. = **May** he *control* his folk at will. (Layamon's *Brut* 3335 [a1225 (?a1200)])

c. Now **lat** us *ryde*, and herkneth what I seye. (*The Canterbury Tales*, I. 855 [c1375-a1400])

松瀬（2013, 2014）では，接続法現在定形動詞構文と命令法構文（命令「文」）の構文的グラデーションを「原形不定詞」というキーワードで論じたが，そこでは議論しなかった，後者に属する let NP 構文も，また別の意味で接続法形と深く関わっていたのである．しかもその機能は，純粋な命令だけでなく，(9) にあるように，一・三人称の場合には，ある種の祈願となる．ここに，「従属節接続法平叙文～祈願文～命令文」の意味機能的グラデーションが浮かび上がってくることになる．[10] そしてここで祈願文がその中央に位置していることは非常に意味深長である．なぜなら，目的を表す副詞節（従属節）が独立的に使用され，それが（Sweet（1891）が「特別な種類の祈願文」と言っているように）容易に願望表示に変わっていくことは明らかだからである．

さらに，（10b, c）に見られる一人称複数 let 構文である let we と let us の関係も興味深い．歴史的には，前者の let 主格 NP 構文からスタートし，この場合，他の法助動詞に見られる，いわゆる疑問文における倒置とは機能が違うことから，またさらに，使役構文と類似した「定形動詞の後・不定詞補語の前」という位置関係および動詞 let の使役性も相俟って，主格 NP が対格 NP として現れる，いわゆる「不定詞付き対格（accusative with infinitive）」構文になったのではないかと考えられる．[11]

そして改めてここで，may 祈願文の倒置語順ということを考えたとき，祈願文は，元来 I wish/hope 等に導かれた従属節として現れていたことを含めて，一般に従属節での接続法からの発達であること，さらに同様の機能を有する let NP 構文と共存していたことからすると，祈願表現はすべて何らかの導入部（I wish/（would）that/let）を持つ構文に現れていることが分かる（そこには多分に，神のような超自然的な何かに縋りたいという人間心理が働いているものと思われる）．であれば，ある意味「新興の」may 祈願文において，祈願の

要素を導入する／注目させるためには，その形は当然 may で始められなければならないことになろう．そして考えられるもう一つの理由としては，もし「主格 NP ＋ may」の語順になった場合，許可や蓋然性を表す独立した平叙文の may 構文との区別がつきにくいという要素もあったのではないだろうか．

3 may 祈願文の通時的発達

3.1 古英語（OE）および中英語（ME）

PDE における may 祈願文の振る舞いがある程度確認できたところで，次にその成立について振り返ってみよう．*OED*[2]（s.v. *may*, 8. a）には以下の記述があり，蓋然性を表す may は，まず，目的や結果を表す節で使われるようになったとあるので，このことからやはり，従属節からの発達であることが見て取れる．また，（11b）から分かるように，この状況は既に OE において見られる．

（11）a. Since the desire for an end involves the desire for the possibility of the end, *may* in sense 3 [= objective possibility, opportunity, or absence of prohibitive conditions] in combination with an inf[initive]. is used, in clauses involving the idea of purpose or contemplated result, to express virtually the same meaning as the subjunctive of the principal verb. Hence this combination has come to serve as a periphrastic subjunctive, which has in ordinary prose use superseded the simple subjunctive in final clauses.

b. Hwæt **wilt** ðu þæt ic þe do? He cwæð, Drihten, **þæt** ic **maȝe** *ȝeseon*.
= What do you want that I *do* to you? He said, Lord, (so) **that** I **may** *see*.
(Ælfric, *Homilies* (Th.) I. 152 [c1000])

さらに続けて, *OED*[2]（s.v. *may*, 8. b）は以下のように指摘し, その初出例である（12b）は 16 世紀としているが,

（12）a. In exclamatory expressions of wish, *may* with the infinitive is synonymous with the simple present subjunctive, which (except *poetic* or *in rhetoric*) it has superseded. The subject normally follows *may*, but examples are found in older language in which this is not so.

b. Long *liue* Cosroe, mighty Emperor!/ And Ioue **may** neuer let me longer liue/
Then I may seeke gratifie your loue! (*Tamburlane the Great*, I. i [1586])

それはしかし，倒置された「may ＋主格 NP」ではなく，「主格 NP ＋ may」の語順であったことに注意せねばならない（さらにそこでは，接続法現在定形動詞構文と may ＋不定詞構文が共存していることも分かる）．そこで，堀田（2015）でも指摘されている Visser（1969: 1785-1786）を見てみると，実はそれよりも 300 年も早い 13 世紀からの例が挙げられている．

（13）a. wel hem **mai** *ben* ðe god beð hold! (*Genesis & Exodus*, 3283 [c1250])

b. Nowe goo we forthe all at a brayde! from dyssese he **may** us *saue*.
(*Chester Whitsun Plays; Antichrist* (in: Manly, Spec. I) p. 176, 140 [c1425])

c. *Soet* vox tua in auribus meis, that ys, Thy voyce **may** *sounde* in mine eres.
(*Miroure of Oure Ladye* (EETS) p. 34, 34 [1450])

しかも，（13a）は非人称構文であり（それでも与格 NP は may の前に現れている），（13b, c）共に，「主格 NP ＋ may」の語順である．[12] ただ，奇妙なことに，*MED* には，この may の「主節」用法の記述は見あたらない．あるのは，従属節でのこの may の用法（14a）と ‘might’ の主節用法（14b）のみである．

（14）a. In weakened varieties of sense 2. [= to be able (to do something)], in which the ability or potentiality becomes mere possibility, or is made contingent upon something else: to perhaps be able (to do or have something, etc.), might be able; may, might; ...; ... —used to express doubt, uncertainty, contrariness to fact, a wish, a purpose, etc.;— often used in **if**, **hou**, or **that** clause: (s.v. *mouen*, 3)

b. Past tense forms with present and future meaning: ... (c) in wishes and requests: **ai mighte he liven**, may he live forever!; **crist him mighte blessen**, may Christ bless him! (s.v. *mouen*, 4)

おそらく *MED* は，（13）の各例は，文脈から判断して，主節の祈願と言うよりもむしろ従属節的捉え方をしているのではないかと思われる．特に，（13b）では，当該の祈願文は，Nowe goo we forth（= Now let’s go forth）に付随する目的を表す副詞節とも捉えることが十分に可能であろう．

したがって，これらの事実から考えられる may 祈願文発達のシナリオは次のようになる．まず接続法の全

般的な衰退に伴い，祈願文の場合 may によるその置換が徐々に始まり，次第にその迂言的表現の方が主流になっていく中で，前節で述べたように，一つには，祈願を導入する語頭に，ある種の「マーカー」の必要性が認識され始めたこと，また一つには，別機能の may が現れる平叙文 You may ... との混同を避けるために，May you ... となったのではないかというものである．

さらには，前節では let NP 構文と may 祈願文との競合関係を議論したが，それに加えて，may と類似する法助動詞 mote（< ME moten）と may（< ME mouen）との競合関係も調べる必要があることを，堀田（2015）は主張している．確かに，PDE においても，Curme（1977［1931］）や *OED*[2] に僅かながら mote について以下のような記述がある．

（15）In general, the new subjunctive form with *may* and a dependent infinitive clause is more common: '*May* you see many happy returns of this occasion!' '*May* he return soon!' '*May* I never see such a sight again!' 'So *mote* (archaic present subjunctive of *must*, once used here with the force of *may*) it be!' (p. 398)

（16）a. In wishes, forming a periphrastic subjunctive; = MAY. Often in asseverative phrases, **so mote I thee, so mote I go, etc.** (s.v. *mote* 1. c)

b. Iblessed hi seyde **mote** he *beo* þe cumeþ on godes nome.

(*Passion Our Lord in An Old English Miscellany* 39 [c1275])

まず，（16b）の mote 祈願文の初出例では，その語順は「X ＋ mote ＋主格 NP」であったことが分かる．そこで次に *MED* を見てみると，以下の（17a）"in wishes, prayers, expressions of future contingency, etc.: may, might, will, shall"（s.v. *moten*, 7. c），（17b）"In prayers"（s.v. *moten,* 9），（17c）"In selected oaths and asseverations"（s.v. *moten*, 11），そして（17d）"In selected blessings and curses"（s.v. *moten*, 12）のような用法があり，それぞれの初出例は（16b）と同じく 13 世紀になっている．

（17）a. ȝef swuch mahte & strengðe i mine wordes, ..., **moten** *missen* þrof.

(*The Life of St. Katherine* (Einenkel) 653 [c1225 (?c1200)])

b. As ure lauerd leue þurh þe grace of him seolf þet hit swa **mote** [Nero: þet hit so **mote** *beon*], amen.

(*Ancrene Riwle* 221/11 [c1230 (?a1200)])

c. La, swa ic auerre **mote** *iþeon*, ich wulle his an barh beon. (Layamon's *Brut* 31076 [a1225 (?a1200)])

d. A **mote** þu wel *færen*, & Delgan mi dohter. (Layamon's *Brut* 4481 [a1225 (?a1200)])

また，上記（14b, c）のように，既に ME において過去形 might が現在や未来の願望を表した事実があり（cf. 註 **4)**），さらに，*OED*[2]（s.v. *mote*）には，以下のような記述もある．

（18）In the 16th c[entury]. it was often confused with *mought* (see MAY v[erb].), with which it was prob[ably]. identical in sound. In the early part of the 16th c., the verb [*mote*] was still used correctly as a present tense, though commonly misspelt *mought*.

これらのことから，mote には元々 may と類似した機能があっただけでなく，その音形もまた，may の過去形の一種と非常に似通っていたことが分かる．しかし，その後 mote 自体が（その過去形である must は命を長らえることとなったが）may にその機能を全面的に譲渡する形で衰退していき，最終的には，一部の定型表現にのみその痕跡を留めることになったのであろう．

3.2 初期近代英語（EModE）

Visser（1969）の may 祈願文初出例は 13 世紀だが，上述のようにそれらはどうも「完全な」may 祈願文とまでは言えない可能性も依然として燻っており，上例（12b）で見たように，*OED*[2] では，その初出は 16 世紀とされていた．その EModE 期の状況について Rissanen（1999）は次のように指摘している．

（19）As in Present-Day English, the present subjunctive expresses a realisable wish (optative subjunctive) or exhortation (hortative or mandative). In Early Modern English the optative subjunctive is largely restricted to formulaic contexts, such as *God forgive him*, *Lord help our understandings*, *Heaven grant*, *God save*, *long live*, etc. (p. 228)

（20）a. The optative subjunctive is often replaced by a periphrasis with *may* and the hortative subjunctive with *let*.

b. Of these two periphrasis, the one replacing hortative subjunctive seems to develop more rapidly: in Marlowe, at the end of the sixteenth century, the hortative periphrasis clearly outnumbers the subjunctive,

particularly in the 1st pers[on]. pl[ural]., while the optative periphrasis is less common than the subjunctive. (p. 229)

（19）より，接続法現在定形動詞構文の祈願文は，この頃既に「定型化」してしまっており（このことが逆に接続法現在を生き残らせることに繋がった），その当時接続法が衰退の一途を辿っていた状況が察せられる．つまり，トレンドは既に迂言形であった．しかし，その浸透速度には遅速があったらしく，EModE 期においては，両者が不定詞を伴う類似の構文であったにもかかわらず，may 祈願文に比べて，let NP 構文の方が急激に発達したと Rissanen は断じている．[13] これはある意味，let NP 構文に機能的にそして構文的に牽引される形で may 祈願文が台頭してきたとも考えられる．つまり，God *bless* you. と **May** God *bless* you. を並置すると一目瞭然なように，may 祈願文は主格 NP と定形動詞の倒置と考えるよりもむしろ，接続法現在定形動詞構文の祈願文に「may を付加した」という感じで捉えられ，may をある種の「祈願マーカー的」導入部として機能する語用論的不変化詞［pragmatic particle］（Quirk et al. 1985: 147）を祈願内容に添えるという類推的発想があったのではないかと思われる．

4 may 祈願文ができるまで

最後にまとめとして，これまでの議論を，祈願文を構成する主要要素による骨組みとして提示し直すと，以下の（21）のように，STAGE 1 から STAGE 5 が想定できるだろう（［ ］内は，当該の祈願内容が現れるのは「主節」か「従属節」かを示している）．

（21）a. **STAGE 1**: OE ～
I wish that NP-Nom[inative]. ＋ V-S[u]BJ[unctive].［従属節］
... (so) **that** NP-Nom. ＋ V-SBJ.［従属節］

b. **STAGE 2**: OE ～
NP-Nom. ＋ V-SBJ.［主節］ ex) God *bless* you!
X ＋ V-SBJ. ＋ NP-Nom.［主節］ ex) Long *live* the Queen!

c. **STAGE 3**: Late OE ～
I wish that NP-Nom. ＋ MAY ＋ Inf[initive].［従属節］
... (so) **that** NP-Nom. ＋ MAY ＋ Inf.［従属節］

d. **STAGE 4**: ME ～ *EModE / ME ～
NP-Nom. ＋ MAY/MIGHT ＋ Inf.［主節］[14] ex) Thy voyce **may** *sounde* in mine eres. （13b）
*X ＋ NP-Nom. ＋ MAY/MIGHT ＋ Inf.［主節］ ex) from dyssese he **may** us *saue*. （13c）
X ＋ MAY/MIGHT ＋ NP-Nom. ＋ Inf.［主節］ ex) ai **mighte** he *liven*. （14b）
Cf. (X) ＋ MOTE ＋ NP-Nom. ＋ Inf.［主節］ ex) **mote** þu wel *færen* （17d）
Cf. LET ＋ NP-Nom. ＋ Inf.［主節］ ex) **late** we hine *welden* his folc ... （10b）

e. **STAGE 5**: EModE ～
MAY ＋ NP-Nom. ＋ Inf.［主節］ ex) **May** the force *be* with you!

実は, **May** the force *be* with you! が「理力の共にあらんことを」（願う）や「理力があなたと共にありますように」（［神などに］願う）と日本語訳されることから分かるように，主節の省略や目的を表す副詞節と捉える点は日英語の祈願文に共通しているのである．

註

* 本稿は，2015 年 9 月 12 日に熊本大学で開催された「熊本言語学談話会（KLC）」で筆者が発表した内容を加筆修正したものである．当日，熊本大学の登田龍彦先生・市川雅己先生，熊本学園大学の原口行雄先生には貴重なご助言をいただいた．この場をお借りして感謝申し上げます．

1) 以下に示す全ての例では，オリジナルでのイタリック表記等に加えて，下線・傍点・ゴシック表示・動詞形態のイタリッ

ク表示および［　］内の補足記述が筆者によって施されている．

2) （1a）の live は定形ではなく，非定形の原形（不定詞）という捉え方も可能である．要請や勧告を表す動詞と共に用いられる従属節における接続法現在を should の「省略」とする見方と同様に，（1a）も **May** the Queen *live* long! の May が省略されたものと見ることもあながち不自然ではないだろう．

3) 古川（1958: 154）によれば，（i）のように，古典ギリシア語でもこの would that と同値とも言える ειθε が希求法（現在中間態）の γενοιντο を含む願望従属節を導く役目を担っていたらしい．Smith & Melluish（1968[2]: 84）は，これを "a particle expressing a wish" として，その英訳に would that を挙げている．

（i）**Ειθε** *γενοιντο* ευδαιμονες.（= **Would-that** *they-become* happy/lucky.)

4) *OED*[2]（s.v. *may*, 8. c）では，その初出例は 15 世紀とされている．

（ii）a. *might* is also used to express a wish, esp[ecially]. when its realization is thought hardly possible.

b. 'Ay **moʒt** he *lefe*, ay **moʒt** he *lefe'* quod ilka man twyse.　(*Alliterative Romance of Alexander* 1605 (Ashm.) [a1400-50])

PDE では, 通常上例（2）のように仮定法過去もしくは過去完了で表すことになるはずだが, *OED*[2] に特に「廃用」の記述はない.

5) （5b, c）から分かるように，それらは動詞で始まっているので，構造的には命令形然としている．その命令形動詞は原形不定詞であるとすると，このタイプの祈願では，定形動詞ではなく原形不定詞が使用されると捉えてもさほど奇異な感じはない．そしてこの見方は，定形動詞 may がそれに付加された場合，定形動詞構文祈願へ移行することを意味する．

6) 安藤（2005）は仮定／接続法を「叙想法」と呼んでいる．またここで引用されている Coates（1983）と Sweet（1891）はそれぞれ，J. Coates, *The Semantics of the Modal Auxiliaries* (London: Croom Helm) と H. Sweet, *A New English Grammar*, Vol. I (Oxford: Clarendon Press) のことである．

7) ともすると目的を表す副詞節と判然と見分けがつかなくなる結果を表す副詞節について，Mitchell & Robinson（2007[7]: 94-95）は，"The subjunctive occurs in result clauses under much the same conditions as in adjective clauses. ... When the principal clause contains an imperative or a subjunctive expressing a wish, ... Here the result is expressed as a tendency." と述べ，命令法や願望を表す接続法を含む主節と共に用いられる，結果を表す副詞節では，接続法動詞が使われるとしている．

8) Come what **may** は，Inf. + NP-Nom. + MAY 型であり，通常の may 祈願文である MAY + NP-Nom. + Inf. 型とも，従属節に見られる NP-Nom. + MAY + Inf. 型とも異なっている点が興味深い．

9) Jary & Kissine（2014: 30）は，"... a language displays a first- or a third-person imperative form if, and only if, directive speech acts directed at the speaker, at a group including the speaker, at a third party or a group excluding both the speaker and the addressee, are prototypically realised with the same imperative sentence type as the directive speech acts directed at the addressee." と指摘し，一・三人称命令形が通常の二人称命令形と異なる証拠として，（iii）付随する付加疑問の主語が異なる点と（iv）スペイン語では，それらに接続法動詞形が使用されることとのパラレル性を挙げている．

（iii）a. **Let** me *explain* what happened before you start shouting, will you?

b. **Let** us *see* what you bought, will you?

c. ?**Let** me *be* technical for a while, will you?

d. ?**Let** us *be* courageous, will you?

e. **Let** us *be* courageous, shall we?　(pp. 36-37)

（iv）a. **Let** it *rain* tonight. Cf. ¡Qué *lluva* esta noche!

b. Allow it to rain tonight.

c. **Let** the team <u>not</u> lose this time. Cf. ¡Qué el equipo no *pierda* esta vez!

d. <u>Don't</u> allow the team to lose this time.　(p. 38)

10) このグラデーションにさらに「感嘆文［exclamatory sentence］」を入れてもいいかもしれない．祈願文にある種の感嘆性があるとすれば，それは命令という形式を媒介にしているとも考えられ，現 に Fischer（1992: 249）は，"The imperative has a tendency to become invariant in form, because it functions like a self-contained, exclamatory expression." と述べ，ME における感嘆文と命令形の類似性を指摘している．

11) 同じく，*MED*（s.v. *leten*, 10. a）では，"(a) may (s[ome]th[ing]. happen or not happen), may (s[ome]b[ody]. or sth. do or be sth.); may (right prevail, God do His will, the day be joined, etc.); may (sth. be acceptable); **let this pin be**, this pin should be; etc.; (b) may (sb.) cause or permit (sb. or sth. to do, be, or have sth.); —used with Christian or non-Christian deities as subjects;" との指摘もあり，一人称だけでなく，三人称にも，**let** this pin *be* のような let 主格 NP 構文があったことが分かる．

12) （13c）が興味深いのは，元のラテン語文では主語・定形動詞倒置が起きているにもかかわらず，その英訳の方では，その倒置を採用していない点である．

13) Mustanoja（1960: 453）が "How popular a means of expression the modal periphrasis is in ME is shown by the fact that in non-dependent clauses the ratio between the periphrastic and inflectional subjunctive is almost 9 : 1 in the 15th century" と指摘している点から判断すると，この（20b）の指摘は，ME 期に既に全体的なトレンドとして，主節において法助動詞迂言構文が接続法現在定動詞構文を凌駕していた事実はあるが，前者に準じる let 迂言形の 16 世紀における発達はそれをはるかに超え

るものだったことを伝えていると考えられる．

14) Google で検索してみると，接続法現在定形動詞構文ではない may ＋不定詞構文である God **may** *bless* you! も皆無ではないが（もちろん従属節では，大量に使用されているが），どうやら非常に少ないようである．God *bless* you! の定型性の方が勝っていると言えよう．ただし，接続法現在が温存されていると言われるアメリカ英語を扱った Fries（1981[3]［1940］: 106）でさえも，祈願文の場合は “Wishes (especially formulas)” とあり，その定型性が際だっているようで，調査された書き言葉の資料全般ではむしろ, 接続法現在は “tended to disappear from use” と述べている．一方, Rohdenburg & Schlüter（2009: 288-290）では，（on (the) condition (that) 節のみに関する調査だが）19 世紀末からアメリカ英語で，急激に接続法現在が多用され始めたことが統計的に示されている．

参考文献

安藤貞雄．2005.『現代英文法講義』 東京 : 開拓社 .

Biber, D. et al. (eds.) 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson.

Curme, G. O. 1931. *A Grammar of the English Language*. Vol. II: *Syntax*. Reprinted. Essex, CT.: Verbatim, 1977.

Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitaku-sha.

Fischer, O. 1992. (Middle English) Syntax. In N. Blake (ed.), *The Cambridge History of the English Language.* Vol. II: *1066-1476*. Cambridge : Cambridge Univ. Press, 207-398.

Fries, C. C. 1940. *American English Grammar.* Reprinted. Tokyo: Maruzen, 1981 (3rd edition).

古川晴風．1958.『ギリシヤ語四週間』 東京：大学書林.

堀田隆一．2014. 英語史ブログ #1867（June/7/2014）May the Queen live long! の語順
http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/2014-06-07-1.html (Accessed September/2/2015).

堀田隆一．2015. 英語史ブログ #2256（July/1/2015）祈願を表わす may の初例
http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/2015-07-01-1.html (Accessed September/2/2015).

Huddleston, R. & Pullum, G. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language.* Cambridge: Cambridge Univ. Press.

Jary, M. & Kissine, M. 2014. *Imperatives.* Cambridge: Cambridge Univ. Press.

Kurath, H. et al. (eds.) 1956-2001. *The Middle English Dictionary*. Ann Arbor: The Univ. of Michigan Press.

松瀬憲司．2013. 未来時に「事実性」はあるのか—英語の直説法と接続法—『熊本大学教育学部紀要』, 62, 91-100.

松瀬憲司．2014. 定形か非定形か—英語の命令「文」について—『熊本大学教育学部紀要』, 63, 73-79.

Mitchell, B. & Robinson, F. C. 2007. *A Guide to Old English.* 7th edition. Oxford: Blackwell.

Murray, J. A. H. et al. (eds.) Prepared by J. A. Simpson & E. S. C. Weiner. 1989. *The Oxford English Dictionary*. 2nd edition. Oxford: Clarendon Press.

Mustanoja. T. F. 1960. *A Middle English Syntax*. Part I. Helsinki: Société Néophilologique.

大塚高信・中島文雄．1982.『新英語学辞典』東京：研究社.

Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Rissanen, M. 1999. (Early Modern English) Syntax. In R. Lass (ed.), *The Cambridge History of the English Language*. Vol. III: *1476-1776*. Cambridge : Cambridge Univ. Press, 187-326.

Rohdenburg, G. & Schlüter, J. 2009. *One Language, Two Grammars?: Differences between British and American English*. Cambridge: Cambrigde Univ. Press.

Smith, F. K. & Melluish, T. W. 1968. *Teach Yourself: Greek*. 2nd edition. Sevenoaks: Hodder and Stoughton.

Visser, F. Th. 1969. *An Historical Syntax of the English Language*. Part III (First half): *Syntactical Units with Two Verbs*. Leiden: E. J. Brill.